

日本語と中国語の呼称の待遇的機能

盧 万才

アブストラクト：

本論文は、日本語と中国語の呼称の待遇的機能について、異文化コミュニケーションの立場から、対照言語学的方法を用いて考察したものである。その目的は、中国語あるいは日本語をそれぞれ第二言語として学習する人のコミュニケーション能力を高めることにある。考察は、「親族名称」「社会通称」「役職名称」「職業名称」「氏名」といった分類にしたがって行った。その結果、それぞれの呼称の使用において、共通にみられる部分とまったく違う部分とが存在することが確認できた。そして、日本語の呼称の特徴は、社会的なルールに規定された定型的なものであるのに対して、中国語の呼称の特徴は、話し手が聞き手との関係や聞き手の身分などに基づいて、自分自身の判断で決定する多様なものであるという結論に達した。

キーワード：呼称、待遇表現、待遇的機能、人間関係、コミュニケーション

1. はじめに

外国語学習の目的は、その外国語を駆使して、その言葉を使用する国の人々とコミュニケーションを行う能力を身につけることにあると言われている。こういう立場から見て、言葉の構造と言葉の使用という二つの側面は、ともに重要な学習内容となる。日本語の使用に関する研究に待遇表現という用語がある。それは話し手の上下意識や親疎意識などに基づく言語表現のことである。その言語表現は敬語を含み、様々な表現形式があり、そして、そういう表現形式は待遇的機能を果たし、コミュニケーションの遂行に役立つのである。

本論文は、待遇表現の様々な表現形式の中から、呼称という形式を取り上げて、その待遇的機能について、日本語と中国語との対照をしながら、両者の待遇的機能の異同を明らかにすることにより、中国語あるいは日本語をそれぞれ第二言語として学習する人のコミュニケーション能力向上に給することを目的としている。

これまでに呼称の日中対照に関する研究は少なからず見られるが、その多くは呼称の構造体系や文化的価値などを中心に論じるものであった。しかし、呼称の持つ待遇的機能がコミュニケーションにおいて、かなり大きな役割を果たしており、特に中国語と日本語とで呼称はそれぞれ違った機能体系を持っているため、その異同を明らかにしなければ日中両言語によるコミュニケーションに支障をきたしかねない。そこで、本論文はそのようなコミュニケーションへの支障を解消するために、呼称という言語形式を取り上げたのである。

2. 呼称の種類

日本語においても、中国語においても、呼称は膨大な体系を持っている。どういう分類で取り上げたらよいかは簡単に決められることではない。本論文は以下に述べるような5分類を枠組みとして考察を進めることを試みるが、この5分類は呼称の待遇機能の分析を行ないやすくするために考えたものであり、必ずしも科学的な分類ではないことを断っておきたい。なお、以下において特に明示がなけ

れば、“ ” の記号の中は中国語、「」の記号の中は日本語をそれぞれ表すことにする。

(1) 親族名称

親族名称は、血縁や婚姻関係によってつながる親族関係の呼び名である。

日本語例：祖父、祖母、父、母、叔父、叔母、兄、姉、弟、妹等

中国語例：爷爷 (おじいさん)、奶奶 (おばあさん)、爸爸 (父)、妈妈 (母)、
叔叔 (叔父)、婶婶 (叔母)、哥哥 (兄)、姐姐 (姉)、弟弟 (弟) 等

(2) 社会通称

社会通称は世間一般に通用している呼称のことである。

日本語例：～さま、～さん、～ちゃん、～君、～氏、先輩、奥さん、旦那さん等

中国語例：先生 (面識のない大人の男性や外国人男性に対する尊称)

女士 (面識のない大人の女性に対する尊称)

同志 (主に面識のない人に対して使う呼称で、新中国が成立してから、80年代にかけてよく使われたが、近年公の場では使われることが少なくなりつつある)

师傅 (「師匠」という意味なので、運転手や、機械操縦者、調理師などのように技能を持つ大人の男性に対する尊称)

老板 (「社長」の俗っぽい言い方で、個人的でかつ小規模の商売に従事する男性に対する尊称)

小姐 (もともと「お嬢さん」という意味で、若い女性に対する尊称であったが、近年、バーで働く若い女性を呼ぶのに使われてきているので、その意味合いはだんだんとマイナスの方向に変わっていく傾向がある¹⁾)

朋友 (「友達」という意味で、主に面識のない若い男性同士の間で使う)

小同学 (面識のない小、中学生などの子供を呼ぶときに使う) 等。

(3) 役職名称

役職名称は、学校や官公庁、会社において勤めとしての役目や職務の名称である。

日本語例：学長、校長、社長、部長、課長、係長、店長、所長、主任等

中国語例：校长 (各種の学校の校長・学長)

处长 (大体日本の部長に当たる)

科长 (課長)

经理 (支配人、社長)

～总 (総支配人)

厂长 (工場長)

主任 (主任) 等

(4) 職業名称

職業名称は、生計を維持するために日常している仕事の内容に応じて呼ばれる呼称である。

日本語例：先生、看護師、運転手、乗務員、係員、八百屋、電気屋等

中国語例：老师 (学校などの先生)

大夫 (医者)

护士 (看護師)

司机 (運転手)

翻译 (通訳)

导游 (旅行ガイド)

售货员 (商店の店員)

服务员（ホテルやレストランの接客係）等

(5) 氏名

氏名は苗字、名前、幼名、あだなというような呼び名である。

日本語例：山田太郎、山田、太郎、花子等

中国語例：杨中华（“杨”（楊）は姓で、“中华”（中華）は名である）

中华（“杨中华”という人と親しい関係にある人からの呼び方）

老杨（“杨中华”に対して親しみを示す呼び方）

小杨（“杨中华”より年上の人が親しみを込めて用いる呼び方）

华仔（“杨中华”の愛称として用いる）

华子（“杨中华”の幼名）等。

以上の5分類についてそれぞれ挙げた例は、その分類の内容の範囲を示すためのものであり、実際にはもっと膨大な量の形が考えられる。以下、この5分類の順で分析する。

3. 日中呼称の分析

3.1 親族名称の待遇的機能

(1) 親族を呼ぶ場合

親族の人を呼ぶ場合、話し手にとって、聞き手が身内か他人かによって親族名称を使い分けることは、日本語にも中国語にも共通して見られる現象である。ただ、使い分けのルールに相違点が見られる場合がある。

①話し手が呼称の直接の対象（本人）を呼ぶとき

例：(日) お父さん、お父ちゃん、パパ

(中) 爸爸 爸爸 爸爸

この場合は日本語と中国語の間に相違がなく、親族名称をそのまま用いるのである。

②話し手が身内に対して親族を呼ぶとき

例えば、自分の弟に対して父親のことを指すとき、次のようになる。

例：(日) お父さん、お父ちゃん、パパ

(中) 咱爸爸 咱爸 咱爸

日本語の場合は、直接本人を呼ぶときと同じ呼称を使うのに、中国語では、“咱爸爸”“咱爸”（いずれも「私たちの父」という意）というふうに、話し手と聞き手の共同の父であることを示すのである。

③話し手が他人に対して自分の親族を言うとき

例えば、話し手が同僚に対して自分の父親を言うとき、

例：(日) ちち、 父親、 おやじ

(中) 我爸爸 我父亲 我爸

という対応になる。日本語では親族名称の謙称を用いるのに対して、中国語では“我爸爸”（私の父）、“我父亲”（私の父親）というように、「私の」ということを明示する。もっともこの場合は、中国語にも“家父”“家严”という謙称があるが、それは文語的に書き言葉として使われる。

待遇機能からみると、日本語の「父親」は「ちち」より少し改まった感じがあり、「おやじ」は少しでも改まった感じがするという使い分けがある。中国語の“我父亲”も“我爸爸”や“我爸”より改まりの感じを与える。この点では日中は同じようである。

④他人に対して第三者の親族を言うとき

例えば、話し手が誰かに向かって、第三者の父親を言うときに、

例：(日) ~さんのお父さま、~さんのお父さん

(中) 〃〃的父亲 〃〃的爸爸

というように、日本語と中国語とでは同じ構造になる。

(2) 親族以外の人を呼ぶ場合

日中親族名称の使用において、明らかに違っているのは、親族関係以外の人に対する親族名称の使用であるとみられる。

①使用範囲とルール

筆者の調査によると²、親族名称の使用に関しては、中国人は隣人に対してかなりの割合で親族名称を使うという結果がみられた。そのうち、上の世代の隣人に対して、92パーセントの回答者が親族名称を使うと答えた。それに対して、同様の答えをした日本人の回答者は一人もいなかった（もっとも、調査された対象が大人の社会人であったことも影響したかもしれない）。

一方、鈴木（1973）は、日本語の親族名称の虚構的用法について詳しく述べているが、それは中国語の状況と違って、他人を親族名称で呼ぶと同時に、他人に対し自分自身をも親族名称を用いて示すのである。つまり、日本語には自称詞としての虚構的用法が豊富に存在するのである³。また、日本語では、見知らぬ人や親しくない近所の人あまり親族名称を用いないとも言われている⁴。それに対し中国語では、知っている人はもちろん、知らない人にも親族名称を用いることが普通であり、しかも、親族関係と同じようなルールで、親族名称を細かく使い分ける。例えば、

老爷爷（おじいさん）——両親より一世代上の男性を呼ぶ。

老奶奶（おばあさん）——両親より一世代上の女性を呼ぶ。

大爷（おじさん）——両親と同じ世代であるが、両親より年上の男性を呼ぶ。

大娘（おばさん）——両親と同じ世代であるが、両親より年上の女性を呼ぶ。

大叔（おじさん）——両親と同じ世代であるが、両親より年下の男性を呼ぶ。

大婶（おばさん）——両親と同じ世代であるが、両親より年下の女性を呼ぶ。

阿姨（おばさん）——両親と同じ世代であるが、両親より年下の女性を呼ぶ。

大哥（おにいさん）——話し手と同じ世代の年上の男性を呼ぶ。

大姐（おねえさん）——話し手と同じ世代の年上の女性を呼ぶ。

老弟（おとうと）——話し手と同じ世代の年下の男性を呼ぶ。

というように、まったく家族的な呼び方である。

なぜ中国では親族関係のルールに細かくこだわるかといえば、中国人の“輩分”（日本語の漢字では「輩分」と書くが、家族・親族間の長幼の順序の意）の意識が強く働いているからである。この“輩分”の上下長幼の順序を間違えると、上の世代の人や、年上の人を侮辱することになる。同じ世代に属する人間同士間で年齢を間違えた場合、年上の人に失礼とはいえ、ある程度許すことができるが、話し手と聞き手の世代差は絶対に間違えてはならないという厳しいおきてがある。例えば、「おじさん」と呼ぶべき人物を「お兄さん」と呼べば、呼ばれた当人にとって許すことのできない侮辱となり、喧嘩になるほどの罵り言葉となる。

②親族名称の待遇機能

中国語では、親族名称を用いることによって相手に対する丁寧さを示すことができる。

例えば、中国語では、路上で20代の人が50代の男性に郵便局を尋ねるとき、

○叔叔、您知道这附近有邮局吗？（おじさん、この辺の郵便局をご存知でしょうか。）

というように、「叔叔」で呼ぶのが礼儀である。しかし、日本語なら、この場合親族名称で呼びかけるといふより、むしろ、「すみませんが」の方が儀礼的であろう。

また、中国語のほうは、親しい隣近所同士、長年一緒に仕事をしている同僚、友人といった関係にある人たちが及びその家族の間では、特に親族名称が使われ、最も親しい間柄を示すのである。

一方、日本語はこの点中国語と逆の機能を持っているように思われる。例えば、日本の映画『釣りバカ日誌Ⅰ』の中に一つの例がある。30歳代の浜崎伝助は初めて出会った60歳代の鈴木一之助をおじいさんと呼ぶのだが、親しくなるにつれ、「おじいさん」を止めて、「スーさん」と愛称で呼ぶようになる。このような場合、中国語なら、鈴木一之助が浜崎伝助より一世代上の人間になるわけであるから、浜崎伝助としては、もし鈴木一之助が自分の父より年上であれば、「大爷（おじさん）」、自分の父より年下であれば、「大叔（おじさん）」と呼ばなければならないのである。

3. 2 社会通称

(1) 使用対象

日本語の社会通称はさらに2種類に分けられる。一つは、「～さま」「～さん」「～ちゃん」「～君」といった接尾辞である。もう一つの種類は、「奥さん」「旦那」というような身分の特徴を表わすものである。それに対して、中国語の社会通称は、そのままの形で身分の特徴を表すと同時に、接尾辞的にも使える。例えば、「先生」は、面識のない大人の男性という身分特徴を表わすと同時に、「王先生」「李先生」のように「姓+先生」というように、接尾辞的に使うこともできる。

日本語で最も一般的に使われる社会通称は「～さま」「～さん」といえよう。「～様」は人の名前の下に添えて、程度の高い敬称となり、サービス業などの公の場においてごく一般的に使われている。例えば、病院で診察を待つ患者を呼ぶとき、「～様」を使う。これに当たる中国語は「先生」と「女士」であるが、使用の範囲は普通、レストランやホテルといったところに限っているか、外国人に対して尊敬の意を表すために用いられる。日本のように病院で診察を持つ患者を呼ぶときには使わず、その場合、ただ「杨中华」というように呼び捨てをするのが普通である。むしろ、中国人には呼捨てという意識がないのである。また、日本語の「～様」は男性にも女性にも使えるが、中国語の「先生」は男性に、「女士」は女性にしか使えない。

また、「～さん」も、名前の下に添えて、「～様」より敬意は低いが親しみのある敬称として、ごく一般的に使われている。例えば、「お父さん」「おたくさん」「山田さん」「お客さん」「旦那さん」のようである。これに対して、中国語にはこのような便利な通称は存在しない。相手と呼ぶとき、人間関係や場面といった要素に応じて、適当な呼称で呼んだりする。例えば、身分のわからない大人の男性を「先生」とか、「同志」、「师傅」と呼び、女性を「女士」と呼ぶのが普通である。また、面識のない小学生を呼ぶとき、「小朋友」「小同学」を使う。もちろん、この場合、上述の親族名称を用いることもある。

ただ、「先生」はすでに述べたように、通常女性に使えないし、使われる場面も限定的である。「同志」は面識のない人に対して使う呼称と言ったが、それも大人同士に限った場合に使うもので、子供が大人に向かって言うことができない。「师傅」は技能を持つ大人の男性に対する尊称であるが、政府機関の役人や警察などの公務員のような人間には使わない、といった制限がある。つまり、中国語には日本語の「～さん」のような誰にでも使えるものはない。

(2) 使い分けのルール

日本語の「～様」は、改まった場面に使うもの、「～さん」は一般的に使うもの、「～君」は目上の者が目下の者に使うものであり⁵、また、「～ちゃん」は目上から目下に呼びかける場合は愛称の意味を含んだり、親しい関係にある相手に使ったりするというように、もっぱら人間関係に基づいて使い分けられている。しかし、中国語の場合は、相手の身分特徴に基づいて使い分けることになる。例えば、面識のない大人の男性に対して、「先生」「同志」「师傅」「老板」「朋友」などいろいろな呼称の選択肢があるが、この場合、インテリ風の相手であれば、「先生」を使い、技能を伴う肉体的な仕事に従事する人であれば、「师傅」と呼び、個人的な商売をやっている人であれば、「老板」を用い、身分の判断をしにくい相手であれば、「同志」か「朋友」を使えばいいということになる。面識のない女

性の場合、通常、既婚者であれば“女士”、未婚者であれば、“小姐”と呼ぶのである。つまり、日本語の社会通称は社会的ルールに応じて使い分けられるのに対して、中国語の社会通称は相手の身分特徴に応じて使い分ける。

また、日本語の場合、同じ相手に対する呼称が場面に左右されることがある。例えば、二人だけで話すときに「～ちゃん」と呼べる相手でも、会議など改まった場面では「～さん」となり、更にその相手に手紙を出すとき、封筒に「～様」と書くようになる。中国語では、通常このような使い分けはみられない。

3. 3 役職名称

(1) 誇張的使用

呼称の誇張的使用とは、相手を持ち上げるために実際の身分よりも上のランクの呼称を用いて呼ぶことである。例えば、「副」のつく役職名「副部長」でも、「副」をつけずに「部長」と呼ぶのがその一例である。この用法は日本語の場合、バーやクラブといった場所で客のことを「先生」「社長」と呼ぶ以外に、日常的な場面では見られないようである⁶。一方、中国では社会一般にこうした呼び方が行なわれている。日本では、副部長とわかっていて「部長」と呼ぶのは、皮肉・あてこすりと受け取られかねないが、中国では、むしろ実際のとおり「副部長」と呼ばれると、当の副部長は相手が自分を尊敬していないというふうに感じる。役職名称に限らず、次に述べる職業名称にもこういう誇張的使用がみられる。

(2) 場面の制限

日本の役職名の使い方には、聞き手が集団内部の人間か否かによって制限がみられる。例えば、

外部の人：「お宅の山田部長にお会いしたいのですが。」

会社の人：「申しございませんが、あいにく山田は外出しております。」

このように、外部の人に対して自分の会社の上司を言うとき、名前で呼ばなければ失礼になる。このような場合、中国語では、特に制限はない。場合によっては、日本語と似たような言い方が考えられる。例えば、

外部の人：“我想找你们的张部长。”（お宅の張部長にお会いしたいのですが、）

会社の人：“真不巧，我们张部长出去了。”（あいにくですが、うちの張部長は出かけております。）

というように、「張部長」の前に「うちの」という限定語をつけた、日本語と似たような使い方であるが、敬意を表わす役職名は捨てていない。しかし、日本語では、上の例のように、会社内部の者は自社の部長をミウチとして扱い、外部の人を上位のヨソモノとして扱う前提に立つので、山田部長への敬意表現を避けて、「山田」と呼捨てにするのが日本社会の規範である。「部長」という役職名を口にする必要がある場合は、「部長の山田」がよいとされる。「山田部長」は敬称の働きをするが、「部長の山田」なら役職そのものの説明となる⁷。

3. 4 職業名称

(1) 使用形式

日本語の職業名称は、「先生」を除けば、通常そのまま呼称として使うことができないようである。「職業名+さん」とか、「職業名+の方」とかいうように敬称をつけて使うのが普通であると言われている⁸。例えば、「運転手さん」「看護師の方」などのようである。一方、中国語の職業名称は、少し複雑になる。“老师”と“大夫”は職業の性質からそれ自体が敬称となり、“老师”とか、“大夫”と、そのまま呼んでもいいし、“王老师”とか、“李大夫”というような形で呼んでもいい。この点では日本語の「先生」も同じ使い方になる。そのほかの名称は、例えば、“司机”“售货员”“服务员”などは年上から年下に使う場合であれば、そのまま使ってもかまわないが、年下から年上に使う場合はそのまま使うと失礼に感じられる。このような場合は、同世代であれば、“司机师傅”“服务员同志”と

いうふうに呼べばいいし、もし聞き手が話し手より一世代年上であれば、親族名称を使って、“司机叔叔”“售货员阿姨”“服务员阿姨”と呼ぶと、礼儀正しいと感ぜられる。つまり、中国語ではこのような場合の職業名称の使い分けは、年齢の上下に影響される。それに対して、日本語では、このような年齢の上下からの影響を受けずに、職業名称に「さん」をつけて呼ぶのが原則である。

(2) 誇張的使用

前述の役職名称の誇張的使用は、中国語の職業名称にもみられる。日本語の「先生」は、何かを教える人、政治家、医師、弁護士といった決まった分野の人にしか使わないそうだが⁹、中国語の“老师”は、日本語の「先生」より、もっと使用範囲が広い。それは敬称として広く知識人層の人を呼ぶことができる。例えば、大学に勤める教職員なら、教師であろうと、図書館の司書であろうと事務関係の職員であろうと、一律に学生から“老师”と呼ばれる。学生から呼ばれるだけでなく、教師からも職員からも“～老师”と呼ばれるのである。日本の大学なら、職員を「先生」と呼べばある種の皮肉と受け取られかねない。筆者自身の経験もそれを証明している。日本に留学中、大学の図書館や事務関係の職員を「先生」と呼ぶたびに、すぐに「いや、先生ではない」と訂正されたからである。

また、中国語の“护士”は看護師のことであるが、そのまま看護師と呼ぶ人もいれば、“大夫”“医生”（いずれも「先生」の意）という呼称で呼ぶ人もいる。これは中国でよく見られる呼称の誇張的使用例である。大体20代あたりの若い看護師なら、明らかに分かるから、「看護師」とそのまま呼んでも差し支えないが、時には年取った看護師もいるので、看護師か医師か判断がつきにくくなり、その場合は“大夫”と呼ぶのが無難である。普通に考えれば、看護師を先生と呼ぶのは皮肉と思われるが、しかし、患者にとっては、自分の健康を守ってくれる病院の人間はかなり貴重な存在であるから、感謝する気持ちを表すためにも、ランクの高い呼称を使うべきだと思われたのであろう。もちろん、注射してくれる若い看護師に対しても、丁寧に処置してもらうための方便として、“大夫”と呼んでも怒られることはまずないだろう。逆に、年取った看護師を“护士”とそのまま呼ぶと、見下げるような印象を与えるおそれがある。

3. 5 氏名

(1) 呼捨て

呼捨てとは、名前を呼ぶとき、様・さん・君などの敬称をつけずに呼ぶことである。日本語にも、中国語にも氏名の呼捨てがみられるが、使用状況が異なる。日本語の呼捨てには、「山田太郎」「山田」「太郎」というように、三種類の形式が一応考えられるが、実際には、学生を対象とした呼び方に関する調査によれば¹⁰、「山田太郎」という形は一度も使われていない。「山田」のような姓だけの形は、男子学生が年下および同年の男子で、特に同じクラブやクラスのメンバーに対して用いるという状況に限られていた。「太郎」という名のみは、父親や時には母親（特に男性に対し）により、また同年および年上の学生（特に男子学生から）によって用いられている。

一方、中国語の名前の呼捨てには、“杨中华”“中华”の2種類しかない。“杨中华”という形は、例えば、前述のように病院で診察の順番待ちをする患者を呼ぶときや、学校や会議において出席を取るときなどに普通に使われている。また、“中华”のような形は、集団内部において親しい関係にある年上や同年の人によって用いられる。

また、中国語の書き言葉には、呼捨てに似たような現象が見られる。例えば、2009年6月26日付の中国の新聞『人民日報』のトップニュースに、

“中国国家主席胡锦涛25日下午在人民大会堂与土耳其总统阿卜杜拉·居尔举行会谈。”

という内容の記事があった。同じ日の『人民日報』のホームページ日本語版では同じ内容が次のように訳されている。

「胡錦濤国家主席は25日午後、トルコのアブドラ・ギュル大統領と人民大会堂で会談した。」つまり、中国語の“国家主席胡锦涛”“总统阿卜杜拉・居尔”を「胡錦濤国家主席」「アブドラ・ギュル大統領」へと、肩書きと名前の位置を逆にして訳したのである。ただし、中国語でも“国家主席胡锦涛”のような呼び方は、新聞記事のように、出来事を客観的に伝える場合にだけ許され、直接本人を呼ぶときには、“胡主席（胡主席）”“阿卜杜拉总统（アブドラ大統領）”というふうには呼ばなければいけないのである。しかし、日本語にはこういう使い分けは見られない。

また、日本語では書き言葉として人名のリストを掲載するとき、呼捨てが必要の場合に、「敬称略」ということわり書きを添えて、わざと失礼なことをしていないことを表明するのである。

(2) 愛称

愛称とは、本名以外の親しみをこめた呼び名である。これは日中ともに見られる形式である。日本語の場合は、例えば、前述の例の鈴木という人を「スーさん」と呼んだり、日本の人気卓球選手の福原愛のことを「あいちゃん」と呼んだりすることになる。一方、中国語の愛称は、姓の前に“大”や“小”を付けて、“大李”“小李”というふうには呼んだり（“大”を付けるか、“小”を付けるかの使い分けは、その人の特徴で決めることが多い。例えば身長が高い、あるいは体が大きい人の場合は、“大”で呼び、その逆の場合は、“小”で呼ぶ）、“李佳”という名前の場合、名の後ろに“子”を付けて、“佳子”と呼んだり、また名をダブルにして、“佳佳”と呼んだりするのである。

(3) 氏名の丁寧度

氏名の丁寧度とは、名前を呼ぶときの丁寧さの度合のことである。次に中国語と日本語の例を示し、それぞれの特徴を見よう。→の指す順に丁寧度がより高くなると考えられる。

日本語では、「山田太郎」を例に取れば、

「太郎ちゃん→太郎→山田→山田太郎→山田君→山田さん→山田様→山田殿→山田部長／山田先生」という配列になる。

中国語では、“杨中华”を例にすれば、

“华子→华仔→中华→小杨→老杨→杨中华→杨大哥→杨经理／杨老师／杨大夫”という配列になる。

上の配列で分かるように、日本語の氏名の丁寧度は、名前の後ろに何かを付けるか、付けたら、何を付けるかという形で示される。それに対して、中国語では、日本語と同じ形式がみられるほか、姓の前に“老”を付けて、“老李”という敬称が作られる。

また、中国語のほうは、“杨大哥”（楊兄さん）のように親族名称も丁寧度の高い形式とされているのが特徴的だといえよう。

4. おわりに

以上の分析から見て、対人関係における呼称の待遇的機能は日本語にも中国語にもみられ、しかも、それぞれ特徴を持っている。総合的に見れば、中国語のほうが日本語より発達しているということができよう。それは、中国語は日本語の敬語のような文法体系を持っていないため、呼称といった語彙的な手段が日本語よりも発達したのであろう。以上の分析を通して日本語と中国語の待遇的機能の相違は次のようになる。

親族名称は、中国語の場合、親族関係以外の人にも一般的に使用し、しかも、親族名称が使われるほど、話し手の丁寧な気持ちが感じられる。また、親族関係以外の人に対しても、親族関係と同じように上下長幼の順序を厳しく守っている。

社会通称について言えば、日本語の「～さん」は、老若男女誰にでも使える、実に便利な形式であるが、中国語にはそのような形式がないから、相手の身分に応じて適当なものを使い分けるのである。

その際、相手が男性か女性か、年配か若者か、知識人や学歴の低い労働者か、といった判断が必要である。そして、その判断に基づいてその相手と呼ぶのに最もふさわしい呼称を決めるのである。また、公の場で名前を知らない人と呼ぶ場合、日本語は「お客さん」とか、「旦那さん」などと呼んだりすることもできるし、相手の身分が分からないとき、「すみません」という呼びかけもできるが、中国語にはそういう呼び方は見られない。

役職名称に関しては、日本語は「副部长」の場合、そのままの形を用いるが、中国語はむしろ、相手を持ち上げる手段として、その「副」を取って、「部長」で呼ぶという誇張的使用が見られる。また、日本語の役職名の使用は、聞き手が内部の人間か、外部の人間かという「内外」の要素に左右されるが、中国語はそういうルールに影響されない。

次に職業名称であるが、日本語の場合、「先生」以外の職業名はそのままの形では使えず、必ず「職業名+さん」という形を取る。それに対して、中国語は、そのままの形を使ってもいいし、相手を丁寧に扱おうとすれば、「職業名+社会通称」という形を使ってもいい。また、中国語では職業名称に関しても、教師ではない人でも「先生」と呼ばれるような誇張的使用が見られる。

最後に氏名について相違を要約すれば、日本語の呼捨ては、両親や、年上といった目上あるいは同輩によって行なわれるものであり、初対面の人や親しくない関係にある人に呼捨てをしてはならない。それに対して、中国語の場合は、両親や年上から呼び捨てにされるほかに、公の場において親しくない人に対しても呼捨てが見られる。

総合的にみれば、日本語呼称も中国語呼称も整然とした社会的ルールに縛られている。ただ、両者を縛るルールが異なっている。日本語の呼称には社会的通念に従って行われる客観的、定型的な特徴が見られるのに対して、中国語の呼称は、相手との関係や相手の身分などに基づいて、個人的な判断で決定する主観的、多様な特徴が見られる。その典型的な例は、中国語の呼称の誇張的使用である。日本語の対人関係の表示は文法体系の敬語によって実現でき、呼称に頼ることが少ないのに対し、中国語の対人関係表示は、呼称を含む語彙的要素に頼るところが大きいからである。したがって、中国語の待遇表現における呼称の待遇的機能は、かなり大きなウエートを占めているということがいえる。

付記：

本論文は、黒龍江大学博士助成金による研究の一部である。なお、日本語の呼称の使用に関しては、黒龍江大学の日本人教師で、元日本の高校国語教員であった須藤實先生から貴重な意見をいただいた。

注

1. 本論文で論じた中国語の呼称の使い方は、北京を中心とした北方地域の状況に基づいて内省したもので、方言や地域差によって生じる差異についての考察は別の機会に譲りたい。
2. 盧万才(2002)を参照。なお、薛鳴(2000)にも類似の調査があり、それによると、日本人の大学生が上の世代の隣人だけに親族名称を使うことがみられるという。
3. 鈴木孝夫1973, p. 159。
4. 付記に記してある須藤實氏による。
5. ただし、日本の国会議員などは「～君」で呼び合う場合がある。大石(1966: 44)によれば、これは、古く同輩以上の人に対する敬称として用いた「～君」の用法が国会議場内という特殊社会にだけ残っているものであり、現在用いられている「～君」とはまったく性質の違ったものであるという。
6. 橋本永貢子2000, p. 111。

7. 日本文化庁1995, p. 38。
8. 田中春美・田中幸子1997, p. 121。
9. 三省堂『スーパー大辞林』「先生」の項参照。

参考文献

- 輿水 優 (1977) . 「中国語における敬語」『岩波講座日本語 4 敬語』岩波書店
- 鈴木 孝夫 (1973) . 『ことばと文化』岩波新書
- 薛 鳴 (2000) . 「親族名称に見られる関係表示—日本語と中国語の比較から—」『社会言語科学』第2巻 第2号、日本社会言語科学会
- 孫成崗他 (2003) . 「中日親属称呼比較研究」『日語研究』第1輯、商務印書館
- 田中春美・田中幸子 (1997) . 『社会言語学への招待』ミネルヴァ書房
- 藤堂 明保 (1974) . 「中国語の敬語」『敬語講座8巻世界の敬語』明治書院
- 日本文化庁 (1971) . 『日本語教育指導参考書2・待遇表現』大蔵省印刷局
- 橋本永貢子 (2000) . 「敬語としての人称語—現代中国語の場合」『文化と風土の諸相』文理閣
- 盧 万才 (2002) . 「中国語と日本語の呼称の敬語機能に関する調査」『日本中国語学会第52回全国大会予稿集』